

ゴジラがまちにやってきた！

マイケル社長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2016年 11月3日 木曜日

東京湾より出現した巨大不明生物に、日本は、人類は恐怖のどん底に叩き落された

あの日から4年

わたしたちはあの出来事の総括なきまま、明日へと歩んでいる

本書は4年前東京に住んでいたことで、数奇な運命をたどった1300万人のうち1人とその周囲の市井の人々の声をまとめたものである

目次

まえがき	1
主な登場人物のみなさん	4
11月3日 木曜日	8

まえがき

この原稿をしたため始めた2020年9月11日、衝撃的なニュースが飛び込んできた。

米国が1992年以来、28年ぶりにネバダ核実験場で核実験を行った。

そのわずか4日後には、フランスが24年ぶりにポリネシアにおいて核実験を強行したのだ。

世界的な核軍縮の流れに逆行する2カ国の暴挙に、中国、ロシアといった安保理常任理事国からドイツ、イタリアを中心とするEUの中核国、ベネズエラ、イラン、北朝鮮などの反米国家に、サウジアラビアを中心とする中東諸国が一斉に米国とフランスを非難する声明を発した。

一方英国、イスラエルといった親米国家からいわゆる「核の傘下」であるオランダ、トルコなどは賛意を表明している。

我が国では9月12日、赤坂秀樹官房長官が定例会見において真っ先に両国の核実験支持を表明、国内外において激しい甲論乙駁が巻き起こった。

少なくとも、両国とも何を対象として核実験を強行したのかは論ずるまでもあるまい。

幸いにして今日まで対象に変化は起こっておらず、毎日の定点観測において胸部中心部の温度に—19.6℃から上昇が見られたことはない。

また4年前に東京の中枢を汚染した放射性物質は半減期をとうに過ぎ、旧東京駅周辺のごくわずかを除き、都内各所の放射線数値は1時間当たり0.12マイクロシーベルトと、人間が日常生活を送るのに何ら問題ない数値まで低下している。

後述するが都内への還流人口は年を経るごとに増加し、いまや悲劇と復興のモニタメントとして観光地化すらしている。

そのような呑気な日常を送る我々は改めて思い知ったはずだ。
世界はいまだ、東京に核を向けているのだと。

その刻が来れば、世界は容赦なく東京ごとヤツを蒸発させるのだと。

赤坂長官の会見を受け、定例会見で「安易な核使用容認は世界の破壊につながる。さらなる議論を尽くすべきだ」といつものように歯に衣着せぬ発言をした矢口蘭堂復興大臣だったが、そもそも4年前のあのとき、安易に核を使用させなかったことが本当に正しかったのか、当時事実上の政務執行者だった矢口大臣は答えていない。

この4年間、官民挙げて復旧・復興に取り組んできたことは素直に評価できるが、我が国の政治と経済の中枢機能が今後も完全に補完されぬ、極めて不安定な状況下に置かれたことで生じた損失は膨大なものだ。

年間で約17兆円と試算された巨大不明生物の観測・調査費用。

直接・間接的かつ継続的に生じる経済的損失が年間約28兆円。

これに、2016年当時に生じた回収できていない被災損失が95兆円加わる。

※核兵器使用によって巨大不明生物を滅却した場合、損失額は概算で890兆円である。

このペースだと、あと14年で核兵器を使用した場合の損失を上回ることになる。

そして、あと何年で事態が完全に収束するのかは、誰もわからない。

間もなくあの日から4年を迎えようとしている。

普段興味なく過ごす人々が、思い出したように事件を語り出す。

何度目かの「絆」「復興」が声高に謳われる。

だが、あのとときの総括を行わぬまま、未来へ進んで良いものか。

現実的な数字を示した上で道しるべを指差す政治家は、ついで現れていない。

このような状況に閉塞感を強く覚えるのは、私ばかりではないはずだ。

前置きが長くなったが、本書は現政権や体制、世界情勢をを批判することが目的ではない。

巨大不明生物災害後の世の中に問題提起をするつもりでもない。

被災後、ジャーナリストとしてある家族と交流を持つことができた。

その家族は私の素性を知り、被災経験を通して自己の思想を主張することが目的の人々とも、証言を語ることで謝礼をせしめようとする人々とも異なった。

私の良き隣人であり、妻と子を亡くした私を救ってくれた恩人でもある。

彼女たちが語ってくれたことは、4年前のあの日、東京に住んでいた幾多数多の人々がたどった道のひとつにすぎないかもしれない。

だが、彼女たちが語ってくれたことにこそ、先に提示したテーマの解があるように感じたため、本書をしたためた次第である。

※本書に登場する人々の肩書・年齢等は注釈なき限り、2016年当時のものである。

また登場する人々は、本人の了承を得た上ですべて実名で表記している。

※敬称略

主な登場人物のみなさん

まえがき

山下家

山下 美鈴（12歳）

江東区立砂町小学校6年3組

山下 翔也（7歳）

江東区立砂町小学校1年6組

山下 輝良（42歳）

警視庁警備部第3機動隊副隊長

山下 響子（40歳）

医療法人報徳会東洋堂病院放射線科看

護主任

向井家

向井 平太（41歳）

向井モーターズ社長

向井 愛香（41歳）

向井モーターズ専務

阪口家

阪口 那月（12歳）

江東区立砂町小学校6年3組

阪口 郁美（38歳）

派遣社員

阪口 衡平（48歳）

江東区役所総務部危機管理室次長

久保家

久保 深結（12歳）

江東区立砂町小学校6年3組

久保 志津子（42歳）

スナック「seasoning」経営

者

梅澤家

梅澤 和樹（12歳）

江東区立砂町小学校6年3組

梅澤 瑠璃（17歳）

東京都立第三商業高校2年2組

梅澤 栄達（20歳） 砂町郵便局員
梅澤 信吾（51歳） 砂町銀座商店街組合長
梅澤 栗子（49歳） 「barber梅澤」店主

砂町小学校

中村 俊樹（38歳） 江東区立砂町小学校6年3組担任
吉田 勝人（59歳） 江東区立砂町小学校校長
岩本 輝夫（55歳） 江東区立砂町小学校副校長
佐藤 絵里（40歳） 江東区立砂町小学校6学年主任

※いずれも2016年、巨大不明生物災害発生当時の年齢・役職

私が本書に登場するみなさんが暮らしていた江東区砂町を訪れたのは、2018年9月である。

2016年11月7日月曜日、巨大不明生物が首都中枢で放出した放射能プルームは当時南東へ吹いていた風に乗って江東区全域を汚染した。

既存の放射性元素のいずれにも当てはまらない新元素（米国DOEにより、ジラニウム103、ジラニウム105と命名された）は半減期が20〜30日程度であることが早い段階で判明した。

被災3区を除く都内南部は比較的早いうちに警戒区域が解除され、翌2017年真っ先に帰還宣言を出した江戸川区と葛飾区を筆頭に、主に城東地域にて帰還の流れは加速度的に進んだ。

江東区も2018年6月に警戒区域指定が解除され、同年度末には区民の3割強が元住んでいた場所へ戻ったとされている。

当時神奈川県川崎市武蔵小杉に住んでいた私には、同じ江東区でも取材で幾度か訪れた豊洲・有明地区と異なり、話を聞くまで砂町という地域があることもよく知らなかった。

住民が戻り始めたことで砂町銀座商店街にも活気が戻り始め、復興のシンボルとしてテレビにも取り上げられていた時期だ。

当時訪れた身として、良いところしか映さないテレビ取材とのギャップをまじまじと感じたことはいまでも印象的だ。

「昔っからそうだよ。テレビ局の連中は事実を報じやしねえんだから。アイツ等自分たちが報じたい内容にうまく編集して放送しやがる」

砂町銀座商店街の梅澤組合長が私の髪を薙りながら、忌々しげにつぶやいたことが耳に残っている。

ジャーナリズムの世界に生きる者として、テレビ局にも都合や事情があることは理解しているのだが、そんなことを組合長に説くつもりはなかった。

そもそも帰還宣言が出されて真っ先に戻った砂町銀座商店街の方々だが、報じられたように復興の中心にならんとしたわけでも、元気に活き活きと頑張ろうと先陣を切ったわけでもない。

「先祖代々、うちはここで髪梳き屋だったんだ。ゴジラだろうが放射能だろうが、この地を離れちゃバチが当たたらあ」

そう語る梅澤組合長だが、放射能の影響を受けやすい10代までの子を持つ家庭を中心に、安全宣言が出されたいまでも帰還を躊躇う、またはあきらめた家庭も多い。

「うちも家庭外別居だよ」

そう言ってガハハと笑う組合長も、本人とご長男以外の家族は都外に避難したままだ。

「下の息子が高校卒業するまでは仕方ねえよ。第一、避難先の生活が当たり前になってんだ、それ捨てちまってこっち来いってのもひでえ話さなあ」

口調は明るい、鏡に映る組合長の表情はどこか寂しげだった。

「記者さんな、砂町に戻るのも正解、放射能怖いのも正解、いまの生活捨て去りたくないのも全部正解だよ」

散髪が終わって勘定の際、離れたみなさんに戻ってもらいたいですか？ いささか失礼とは思ったがそう訊いたところ、組合長が笑って答

えた。

それから私は、商店街の様子から児童生徒が都外に散らばったことで休校中の砂町小学校、そしてある人物から頼まれた区内のあるマンションを写真に収めた。

被災前と比べて町は人気はやや少なく、警戒のパトカーが頻繁に巡回する中、教えられた大通りから一本入った道にあるマンションは、ベランダの観葉植物が伸び放題伸び、恐らく都心から流れてきたであろう煤で黒ずんだ壁が掃除されることもない。

こんなところ、もう住めないだろう。

失礼ながら、それが私の感想だった。

だが、このマンションには彼女たちを含め、あの日までいつもの日常を営んでいた人々が住んでいたのだ。

これから本書で紹介するのは、このマンションの3階に居住していた山下家がたどった、巨大不明生物出現からの約1ヶ月の軌跡である。

11月3日

木曜日

『時刻は8時14分になりました、東京FM交通情報。道路交通情報センターの鈴木さん、お願いします』

『お伝えします。本日は文化の日、祝日ということもあり、各地で混雑が多く発生しています。始めに、東京都内の情報です。首都高速湾岸線は東京湾アクアライン入り口を先頭に上下線とも1キロの渋滞、首都高速1号羽田線は天空橋を先頭に上下線とも2キロの渋滞です。続いて、都内箱崎ジャンクションで発生した車両故障により、環状2号線では・・・』

「ああー、渋滞始まったか」

運転席でハンドルを握る輝良がぼやいた。

「ねえねえ、渋滞ってなに？」

後部座席で美鈴と一緒に座る翔也が前のめりになった。

「ん？今日は木曜日だけどみんなお休みだろ。だからシヨウたちみたいに、千葉へお出かけしたい人がいっぱいいて、道路がワイワイしてるんだ」

好奇心旺盛な息子の様子をバックミラーで見ながら、輝良が微笑みつつ答えた。助手席では響子がため息をついた。

「だからもつと早く出ようって言ったじゃない・・・」

日頃の激務からなのか、半夜勤明けによるものなのか、消え入るような声でつぶやく響子。

「悪い悪い、まさかこの車借りるのに土壇場で手続きもたつくとは思わなかったんだ」

輝良は苦笑いした。近所のレンタカー店舗には1週間前から予約していたのだが、明け番を担当していた若い男性がもたつき、出発が遅れてしまったのだ。

「でもまあ、いいじゃないか。貴重なお休みにこんな良い天気でお出掛け日和なんだから」

フォロワーするようにニコニコする輝良だったが、響子は深いため息をついて目を閉じた。

「ほらみーちゃん、スマホばっか見てないで、外見てみな。ホラ、お台場がよく見えるし、この先のトンネル潜ったら羽田空港だ。飛行機の真下走るぞお」

みーちゃん、と呼ばれた美鈴は「ちよつと待って」とややうざったそうに答える。同じクラスの友人たちで作ったLINEグループでの会話に参加中だったのだ。

ちよつとトンネルに入る前、眼前に迫ったフジテレビを撮影してグループに投稿すると、数人から反応があった。

《いーよな、美鈴は》

真つ先に梅澤和樹が反応してきた。

《カズんとこ、お休みの日って忙しいもんねえ》

阪口那月が割り込んだ。

《ナツも今日お出掛けって言ってなかった？》

美鈴が返すと、

《うん。ママが3時までお仕事だから、夕方アリオでお買い物して晩御飯》

《アリオとかwそれお出掛けっていうか？w》

和樹が茶化してきた。

《カズはお出掛けもできないでかわいそーですねーw》

負けじと那月が茶化すと、噴飯やる方ないといったスタンプを投稿してくる。

やり取りに微笑みながら、美鈴は仲良しグループに唯一参加していない久保深結のことが気になった。既読数からすると、どうやら会話には目を通していているようだった。

声をかけるか迷ったが、タップをやめた。深結のことだから、きつと大丈夫、気にしないで言うだろうが、きつと本心ではないだろう。

「お父さん、音楽聴きたい」

気分を変えるように、美鈴はスマホを差し出した。

「ん？そうか。えーと、ちよつと待ってな。これスマホに接続するのは・・・」

輝良が接続されているコードを引っ張り出した。

「お姉ちゃん、エグゼイド聴きたい！」

翔也が右腕にひつついてきた。

「えー、また？昨日も10回くらい聴いたじゃん」

「今日も聴くの！」

ブンブンと美鈴の手を揺らす翔也。

「美鈴、お姉ちゃんなんだから、譲ってあげなさい」

響子が目を閉じたまま言った。うるさいから静かにして、と言いたげな雰囲気だった。

美鈴が面白くなさそうに顔をしかめると、「まあまあ。よし、たまにはみーちゃんのリクエストに応えよう」と輝良は言った。

「えー？」と、今度は翔也が残念そうに顔をくしゃくしゃにした。

「翔也、たまにはお姉ちゃんに譲ってあげなさい。帰り道は翔也の好きなエグゼイドたくさん聴こうな」

「んー・・・わかった」

釈然とはしない様子だったが、翔也は輝良の提案に納得した。またため息をついた響子が気になったが、美鈴はお気に入りの楽曲リストを開いて輝良に渡した。

♪握ったメッセージ that's rising hope♪」

曲と一緒に美鈴が口ずさむ。急に車の速度が緩まった。

「あちゃー、渋滞伸びてるなコリヤ」

前方で車の流れが詰まり始めた。ちょうど羽田滑走路トンネルの手前で、飛び立つべく移動中の日本航空機が眼前にやってきた。

「ホラ翔也、飛行機だぞ」

「うわー、でっかい！」

目を輝かせる男子2人とは対照的に女子2人はしかめ面になる。

「ちよつと静かにして、聴いてるんだから」

口を尖らせる美鈴。響子はうざったそうにため息を吐くと、体勢を変えて目を閉じた。

「あれ、なんだ？事故？」

輝良が前方の電光掲示板に目を向けた。

【東京湾アクアライン 事故通行止め】

東京湾アクアライン、海ほたるパーキングエリアのカフェでシフトリーダーを務めていた真崎典子（45歳　当時）は、後に日本存亡の危機となった事件の発端を間近で目撃した1人だ。

「真崎さん、なんか海の様子が変だよ！」と、パート仲間の名瀬さんが声をかけてきたんです。あの日は朝からコーヒーマーカの調子が悪くて、出勤前の店長に電話してやり方教わりながら修理してもダメだったんです。仕方ないから店長出勤までアイスコーヒート紅茶だけで営業してて、お客様からお叱り受けて気分が萎えていたんです。そんなときですよ、外の人たちが海にスマホ向けてて、私も名瀬さんに言われて海を見たら、真っ白い煙がもくもくと上がってて」

「当初、海底火山の噴火ということで沿岸に避難勧告が出されたそうですねー」

「ええ。あそこに勤めて長かったですけど、緊急放送なんて初めて聞きました。パーキングの警備員がやってきて、避難勧告が出るからお客さんを避難させて、と言うんですね。そんなこと言われても、て気分でしたよ。カフェを運営してる会社で防災訓練やってみたいですけど、店長が参加しただけで私ら知りませんでしたもの。緊急時のマニュアルも事務所にありましたけど、読んだことなんてありませんでした。時間あるときに読んでおいて、とは言われてましたけどね」

「お客さんの様子はどうでしたか？」

「火山噴火で避難、て言われても、いまいちピンときてない人がほとんどだったと思います。第一、アクアラインが両方向通行止になって、車動かせなかつたんですから。しばらくして警察と消防がきて、徒歩での避難を誘導してましたけど、ここに来るお客さんはほとんど車で来てるわけでしょう。車置いてけない、って足が動かない人ばかりでしたよ。あとはスマホで写真や動画撮ってばかりで、警察の人も怒鳴りつけてましたね」

「噴火、というか爆発は10分ほどで収まったそうですねー」

「ええ。いえ、ね。私は噴火なんかじゃなくて、最初はタンカーが何か爆発事故起こしたんじゃないかって思ったんですよ。火山ていつたら、灰色っぽいようなきのこ雲が昇るものじゃないですか。でも海を見ると水が赤く染まり始めて、これは赤潮かも、て考えになりました。実家が館山で漁師やってまして、海が赤くなる赤潮の話は父からきいたことがありますから」

―そこから、海面を割って尻尾が現れたのですね―

「もうね、自分の目が信じられませんでした。煙が収まったねーとお客様の老夫婦と話してたら、いきなり海を破って尻尾が上がったんですよ。最初は尻尾だとも思えなくて、自分は何を見てるんだ、疲れて寝て見た夢なのか、わけがわからなくなりました。その頃には、トンネルから避難してきた人たちが泥だらけでやってきて、トンネルに何かいた、だの、象みたいな足音した、だの話してました。そんなバカな、とはそのとき思いました」

―巨大不明生物が東京・蒲田に上陸した頃には、木更津方面への一方通行で避難が開始されたのでしたね―

「ええ。爆発起きたときは避難に躊躇してた人も、ひきつった顔でした。駐車場の車両がすべて出るまで時間はやかかりましたけど、列を乱すような人はいませんでした。お客様がある程度避難したところには、私たちも自宅へ戻るように、と指示がありました。その日店長は11時出勤でしたから、シフトリーダーの私が音頭取って、パートナーさんやバイトの子たちを帰して、私も職場を出ました。ただ、私は自宅が木更津だったから良かったけれど、東京や川崎から通ってる人もいましたから、木更津へ出たところで行き場に困ったみたいで。その日休みで自宅にいた夫と相談して、戻れない職場の仲間を自宅に迎え入れることにしました」

―全員が千葉から来た人ばかりではないですからね―

「ホントそれですよ。高速降りたコンビニやスーパーはどうして良いかわからない車が集まって、ものすごい混雑でした。電話もつながりづらかったですね。みんな一斉に電話してたんでしょうから。ゴジラが上陸した蒲田や大井町の被害は取り沙汰されましたけど、避難者

が集まった木更津もけっこうな騒ぎになってました。県や市でも休みなのに動きがあつて、町内会長務めてた夫にも連絡ありました。避難者を収容させたいから、地区の公民館を開けてほしいって」

「アクアラインはその後、3日に渡って通行止が続いたと聞きましたが一」

「はい。行楽時期なのにもつたないねって話をしてました。11月7日、木更津から海ほたるまで限定的に開通して、私も職場に戻れました。仕事なくて毎日夫の顔見るのも飽きてきましたから(笑)、やつといつもの生活に戻れたね、て、その日の朝話してたんです……」

「お腹空いたあ」

翔也が運転席に手をかけた。

「うん、そうだな。お父さんもお腹空いた。一緒にもうちよつと我慢しよう」

「ちよつとつてどれだけ?」

「ちよつと」

「えー、お父さんのちよつとつていつつも長いじゃん」

「翔也、いい加減にしなさい」

響子がピシヤリと言い、翔也は頬を膨らませて下を向いた。

「おい、そんなに冷たく言わなくても良いじゃないか」

動きの悪い前方から、助手席の響子に顔を向ける輝良。

「前から思ってたけど、あなたは美鈴と翔也に甘いんじゃないの?」

「それ言うなら、お前だつて普段から……」

「ちよつとお父さんもお母さんもやめよう」

娘に窘められ、輝良も響子も膨れ面で黙り込んだ。

美鈴のスマホにはひっきりなしに臨時ニュースの通知が入ってくる。

【巨大不明生物、蒲田から南大井に侵入】

【大田区、被害拡大も「被害状況の正確な把握が困難」】

【速報 小塚東京都知事が巨大不明生物駆除を目的とした治安出動

を自衛隊に要請」

【品川区全域に避難指示】

【大河内内閣、戦後初の災害非常事態を布告か】

【野党民共党・蓮井党首「武力行使には慎重な審議を重ねることを望む」】

続々と押し寄せる号外通知に混じり、同級生のグループラインからも通知が相次ぐ。

《みーちゃん、大丈夫？ いまどこ？》

久保深結からだった。

「お父さん、いまどこ？」

「ん？ 若洲に入ったから、もう江東区だぞ。あともうちよつとなんだけどなあ」

美鈴はスマホをタップした。

《若洲ってところまできた。江東区だよ》

すると即座にレスポンスがくる。

《大丈夫？》

《うん。お父さんとお母さんというし、巨大不明生物？ もまだ遠いみたいだから》

レスポンスを返したが深結の家庭事情を思い出し、《お父さんお母さん》のくだりは書かなきゃ良かったと美鈴は唇を噛んだ。

《でも気をつけて。品川あたりまで来てるみたいだから》

《マジ？ ありがとう、気をつけるよ》

そう投稿するが、なかなかLINE上に反映されない。投稿に時間がかかっている。

「テレビの映りが悪いな」

輝良がつぶやいた。美鈴にはよくわからないが、よくニュースに出てくる官房長官が何かを会見しているようだが、画面も音声もフリーズすることが多い。

「お父さん、あたしのスマホも何か変」

美鈴が言うのと、「たぶん、みんなスマホ使ってるせいだろう。こういうときは通じなくなることがあるんだよ」と輝良が答えた。

「お腹空いた！」

我慢できない、といったふうに翔也が大きな声を出す。

「静かにしなさい！」

響子が怒鳴ると、うつすらと涙を浮かべ、やがて翔也は泣き出した。

「シヨウ、ほら、お姉ちゃんのスマホでエグゼイド聴こう」

美鈴はイヤホンを取り出し、声を上げて泣く翔也をなんとかなだめる。

「もうすぐお家着くから、お姉ちゃんと一緒に我慢しよ」

そう言う美鈴も、本当は空腹がピークに達していた。東京湾で爆発があつてから首都高速は全線通行止となり、仕方なく家族旅行は中止にして帰路についたが、東京ゲートブリッジを過ぎた辺りから深刻な渋滞が発生し始めた。1時間に500メートルも進まないノロノロ運転の最中、持ってきたおやつもすべて食べてしまっていた。

「もつとおやつ持ってくれば良かった」

イヤホンから流れる音楽にようやく機嫌を直した翔也に少しホツとした美鈴がつぶやいた。

「だいたいお前がおやつは少なくて言うつて言つたからだぞ」

いよいよ映りが悪くなったテレビに業を煮やし、ラジオに切り替えた輝良が響子に口を尖らせた。

「はあ？あたしのせいなの？」

「お昼バーベキューだから我慢しようつてのが裏目に出たな」

「あたしのせいみたいな言い方やめてくれる？だいたいこうなるなんて思わなかつたんだから」

「いや別に責めてるんじゃないけどよ」

「責めてるじゃない。あなたつていつもそう！責めてないつて言つて責めてるじゃない」

「あーもうわかつた！ごめん、私がおやつ持ってくれば良かったつて言つたの取り消すからもうやめて」

美鈴が言うのと再び黙り込み、顔を見合わせない輝良と響子。空腹で機嫌が悪いのはみんな同じだが、不用意な一言でケンカしてしまった両親も両親だし、自分も自分だ。美鈴は頬を膨らませて、窓の外を見

ながら吐き出した。

少しずつだが前が動き出した。ここぞと輝良も続く。しばらく先にパトランプが見えてきた。

「あそこで事故ってたから遅かったのか。お母さん、みーちゃん。あそこを抜ければ早いぞ。もうちよつと辛抱だ」

輝良がそう言ったとき、輝良のスマホがなる。普段鳴らない、しかし聴けば即座にわかるようにしてある通知音だった。

「非常呼集だ」

それまで自分や翔也、響子に向けていた朗らかな顔から、急にキリツとした怖い顔になった輝良をルームミラー越しに見た美鈴。

「お母さん悪い。とうとう非常呼集かかっちゃまった。行かせてくれ」

輝良が言うのと、不機嫌な顔ながらもシートベルトを外して再び車列が詰まったタイミングで響子が運転席に収まった。

「みーちゃん、シヨウ、お父さん行かなきゃいけない。お家までもうちよつとだから、お母さんの言うことよくきいて、気をつけて帰るんだぞ、な」

いつものように優しい口調だが、顔は怖いままだ。家庭では滅多に見せない父の顔に気圧された美鈴は、無言で頷くしかなかった。輝良は手を振ると車列の隙間から走り出し、どこかへ電話をかけながら離れていった。

「お父さん、どうしたの？」

イヤホンを外した翔也が訊いてきた。

「お仕事に呼ばれちゃったんだって。みんなが困ったときにがんばるのが、お父さんのお仕事なんだよ」

運転席の響子が答えた。

「お父さん、いないの？」

幼いながら状況的に心細いのだろう。また涙目になる翔也。

「シヨウ、大丈夫だからね」

美鈴が頭をなでると、袖にすがりついて泣き出した。

スマホの通知が一斉に鳴り出した。しばらく通じない間に、LINE上に動きがあった。同級生の那月のことを、みんなが慰めていた。

お母さんと連絡できない、そんな悲痛な内容だった。

「オフィスで撮影した写真です」

後にこのときの様子を語ってくれた阪口那月の母、阪口郁美はスマホに収められた写真を見せてくれた。ガラス越しに黒煙が線を引き、たように立ち並び、土煙が第一京浜付近に立ち込めている様子を撮影したものだった。

当時IT系の派遣会社に勤務していた郁美はこの日、ニコニコ動画で知られるドワンゴのサテライトオフィスがある品川・天王洲にある天王洲ファーストタワーにいた。午後3時までの勤務を果たし、夜は家族揃って買い物と食事をする約束をしていた。

「ゴジラが蒲田に上陸した、11時頃だったと思います。東京湾から津波が迫っているとか、地震で大田区がひどいことになっているとか、よくわからない噂が流れて、パパに連絡しました。火山噴火が原因で地震起きたみたい、って。そうしたらちようどパパから電話があり、お前は大丈夫か、避難勧告が出ているぞ、て言うんです」

「最初は地震や津波が襲ってきたというデマが流れて、情報が混乱したそうですねー」

「そりゃあ、いまでこそ思うだけで。あのときは災害っていえば地震や津波を連想するのが普通でしたから。まさか、あんな大きな生物が上陸して街を襲うだなんて、微塵も思ってませんでしたよ」

「お勤めされていたオフィスの様子はどうでしたか？」

「私はパパから聞いてましたし、スマホの号外でも品川に避難指示が出されたって通知きてましたけど、上司の反応は鈍かったです。非常時にはビル全体に避難を呼びかける放送があるから、放送で指示があるまで落ち着けて。後でわかったことなんですけど、誤報や訓練放送が多くて、ビルの警備室では区の防災無線を切ってて情報が遅れたみたいだったんですよ。ひどい話ですよねえ」

「避難のときの状況は？」

「この写真を撮影したすぐ後、ようやく館内放送で避難呼びかけがありました。私が働いてたオフィスは20階でしたから、非常階段で降りるまで時間がかかりましたけど、それでもビルを出るまでは整然と行動できました。みんな落ち着いていたっていうより・・・高層ビルだったから遠くばかり見えて、足元が見えてなかっただけでした。地上は大騒ぎになっていて、災害時の指定避難場所になってた天王洲公園は人でいっぱいになってたんです。どう考えてもこんなところ避難できないのに、警備員に誘導されて。同僚が他の避難場所へ行きたいって訴えたんですが、区の指定避難場所はここだけだからとにかくここにいてって怒鳴られるだけでした。そんなことしてるうちに、ヘリコプターの音がしてきました。報道のヘリかなと思っただんですが、レインボーブリッジスレスレに低く飛んでくる、見たこともないようないかつい3機でした」

「この後、当時の大河内総理がヘリ3機に攻撃を命令。しかし射線上に逃げ遅れた人がいたため攻撃を中止します」

「まさか私たちのすぐそばで、そんなこと始めるとは思ってませんでした。後でテレビでやってみましたね、逃げ遅れた避難者への配慮をしたことで攻撃できなかったことが、結果として後日被害が拡大したんじゃないのか、ゴジラを退治できたんじゃないのかって。でも、あんな状態を避けたって例えるんなら、避難って何なんですかね。もしあそこで攻撃してたら、ゴジラを倒せたとしても、巻き添えで亡くなる人はきつといたと思います。あの老夫婦以外にも、避難できてない人はもちろん、私たちがみたいに避難場所へ入れられないのにビルを出ただけで避難したって見なされた人も大勢いたはずですから。そうだったらそうなったで、批判が大きかったんじゃないですか」

「これは娘さんからもうかがいましたが、ご家族から心配の連絡が滞ったそうですね」

「そういう仕事してるからわかりましたけど、ああいうときホントに電話もネットも弱いんです。ちょうどゴジラが地震起こしながら天王洲運河を潜って行って、少し落ち着いた後でしたね。いくら電話してもLINEしてもパパにも那月にも連絡つかなくて。それはあつ

ちも同じだったみたいです。1時過ぎて、とにかく今日は帰ろうってことになり、私も徒歩でなんとか砂町へ戻ったのが夕方6時をだいぶ回ってました。大丈夫だったか！って喜び半分、怒り半分怒鳴ってきいたパパと、抱きついてエンエン泣く那月を見て、ようやく現実に戻った気がして、一気に疲れが出てへたり込みました。安心して家に入ってからです。大量の着信とLINEの通知が鬼みたいに届いたのは」

非常呼集にに応じて車を離れた輝良の言う通りだった。事故現場を過ぎてから車は流れ始め、砂町の自宅へ戻れたのは午後2時をやや回っていた。レンタカーを返却に行つたのだが店頭にも誰もおらず、仕方なく響子はメモを残して車両を敷地に置いた。

「おう、みーちゃん、ショウ！」

レンタカー屋から帰路につくと、近所で自動車整備工場を営む向井平太が手を振って声をかけてきた。

「キョウちゃんも、大丈夫だったか」

「うん。おっちゃんもおばちゃんも大丈夫だった？」

美鈴が答えると、ギツシリ詰まった買い物袋を見せてきた。

「おうよ。こんなことがあつた最中だからな。いま愛ちゃんと買い出しにいつてきたところだ。もう今日は工場休み」

重たそうな袋を持ち上げると、平太は工場兼自宅になっている母屋の中に袋を置いた。

「アキちゃんは、あれか？呼ばれたか？」

平太が訊いてきた。

「非常呼集。こんなときだからね」と答える響子。

そのとき、響子の電話が鳴った。しばらく話していたが、どうやら響子も仕事場から呼び出しがかかったらしいことは、美鈴にもわかった。

「平ちゃん、ごめん。蒲田に住んでる子が出勤どこじゃなくなつたみたいで、あたしも呼ばれちゃった。急で悪いんだけど……」

「いいってことよ！なあみーちゃん、シヨウ」

ゴツくほのかにオイルの匂いがする手で、平太は美鈴と翔也の頭を撫で回した。それぞれが警察官と看護師、それも役職付きということもあり、輝良も響子も家を空けることが多い。そんなときは決まって、向井夫妻が面倒を見てくれていた。

「お母さんも行っちゃうの？」

翔也は響子にすがりついた。

「ごめんね翔也。おっちゃんとおばちゃんの言うことよくきいて、い子にね。美鈴、翔也をお願い」

それだけ言うと、響子はそそくさとマンションに入っていった。

泣きそうな顔の翔也の肩に手を置く美鈴。事情を聞いた平太の妻、愛香が出てきた。

「ようし、みーちゃんもシヨウもお腹空いたろ？おばちゃんいっぱい焼きそば作るから、一緒に手伝って！」

様子を察して、いつものように明るく振る舞う愛香。「あんた、いまのうちに風呂掃除してて」と平太をけしかけると、2人と手を繋いで家に入れた。

ようやく笑顔が戻った翔也。だが美鈴は対照的に表情を曇らせた。今日は普段と違うのだ。いくらおっちゃんとおばちゃんがおばちゃんと一緒に家にはいってほしい…ふいにそう思ったのだ。